



Title	湖崎先生の講演をきいて : 幼児の視力管理
Author(s)	相原, 道子
Citation	大阪公衆衛生. 1981, 44, p. 51-51
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/84018">https://hdl.handle.net/11094/84018</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 湖崎先生の講演をきいて

## — 幼児の視力管理 —

大阪府大東保健所  
相原道子

私達の日頃の業務の%近くが、乳幼児に関する事で占られている感のする昨今、その乳幼児の一生を左右するとも言える視力についてのお話を、特に乳児期、早期幼児期に焦点を絞って伺え、非常に嬉しかった。

心身の発育・発達についてのお話は、聞くチャンスも多く、また、書籍等も手元におく事が多いが、特に視力に関しての専門的なお話を伺ったのは、恥かしいながら始めてであっただけに、鮮烈な印象を与えられた。日常、乳幼児に対する中で、乳児については、光への反応の有無、注視ができるか、追視はどの様に行うか、瞳の形、色の異常、左右差はないか、振盪、落陽現象は……等については、意識的に見ているつもりではあったが幼児になれば、斜視の有無、変な眼つきをしないかぐらいの事、それも特に後者は、母からの訴えがあれば、初めてそのつもりになって、児を観察し、話を聴く……といった調子であった。

しかし、今回の講演で、視性刺激遮断の影響の大きさ、(その時間の短さと、その為に残る障害の余りもの大きさ)に非常なショックを受けた。

それと同時に、1才半、3才児等の幼児の健診で斜視の疑いありと指摘され、そのため医療機関で受診し、その結果が、斜視と診断された人達のほとんどが、アイ・パッチの使用を指示されているかのような感を受けている現状である。が、このような場合、特に年令の低い児についての、アイ・パッチの併害は……と考えると慄然とした。

1才レベルの斜視の児を持つ母への助言のあり方など、今後大いに考えねばならない事と痛感し、その様な場合の具体的なお話がもう少し聞きたかったと思う。

また、もう一点、“ドキッ”としたのは乳幼児の遠視についてのお話であった。

母と乳児との触れあい、特に、あやしたり、遊びかけたり、オモチャを使ったりする時の母と児の距離の取り方については、『乳児の視力は、非常に低いだから……。』という事を踏まえて助言をしているつもりであったが、その児がもしも遠視であったら……!?

それとあわせて、遠視である事が判明した児には、1才位で凸レンズを着用するとのお話であったが、1才以前の児の遠視は、どのようにして発見できたのであろうか、と疑問に思った。終講後、落ち着いて講演内容を読み返していると、「この辺りを、もうチョット聞きたかったな。」という所がでてくるのは、いつの講演後にでも思う事ではあるが、何故それが講演直後の質問を許される時間に、思い浮かばないのか……毎度の事ながら自分のメグリの悪さを噛みしめている。

始めて湖崎先生のお話を聞くチャンスを得てそのハギレ良く、テンポの速いお話の中で随所に、ユーモアを入れながら、それでいて、ピシッ、ピシッ、と要所を決めて行かれる講演に陶然と聴きほれている間に、1時間余が経ってしまった……。というのが実感である。

最後に斯くも鮮烈なショックと、感銘を与えて下さった、湖崎先生と、このような講演会を企画して下さい公衆衛生協会の方々に心より感謝し、今後の業務の中に活かしていくよう努力したいと思っている。

## 付記

次頁に当日の講演会のスナップ写真を掲載しました。